メリヨトヴォ教会フレスコ壁画の文献的な起源

三浦清美

断想　プーシキン館での報告

以下に掲載される論考は1993年12月20日ロシア文学研究所プーシキン館中世文学研究部門定例報告会において行われた報告ДОКЛАДに若干の補遺を行ったものである。ちなみに、旧ソ連の学術機関においては所要時間によって通常報告にДОКЛАДとСООБЩЕНИЕの別があり、その所要時間は前者は40分、後者は20分である。報告会はドミートリイ・リハチョフ、ナタリヤ・ポヌイルコ、オリガ・ヴェルブロヴァ、タチヤナ・ロジェストヴェンスカヤ、ミレーナ・ロジェストヴェンスカヤ、パーヴェル・ブダラーギン、ゲルアン・プローホロフ、ヴィクトル・マルケーロフ、アレクサンドル・ボブロフの諸氏らおよそ30名ほどの専門研究者の臨席のもとに行われ、報告の後、相当に厳格な質疑が行われた。

レニングラード派の中世研究者が一同に会するこの定例研究会の中心は言うまでもなく碩学リハチョフである。この研究会に限らず、ペテルブルグの中世研究者と話していると、研究に傾倒される努力のすべてがこの老大家に対する捧げ物であるかのような印象を受けるときがある。リハチョフの前で学問的な成果を報告することに対する純粋な思い入れは少年の憧憬を思い起こさせるものがある。リハチョフの前で報告された学問的な成果は”権威”というものを前にした緊張の中で一定の評価を得、こうして得られた鳥瞰的な展望がそのまま事後の研究活動の欠くべからざる指針となってゆく。権威といっても各々の研究者はその前で萎縮して発言を手控えるということは全くない。各々が専門研究者としての自覚と責任感を持ち、各々の関心の範囲において、自由な議論を活発に

行なっていたのが極めて印象深かった。“権威”というものがその本来的な機能の中で脈脈と息づいている姿には畏敬の念をさえ感じたものである。

これが中世ロシア学の学徒として真に僥倖と呼ぶに相応しい貴重な体験であったことは言うまでもない。そして、同時に、この報告会はロシア人の心性の不思議に思いをめぐらす機会をも与えてくれたと思う。ロシアの近代的な文献学の始まりはおそらく１８世紀末ムーシン・プーシキンの時代まで遡ることがもっとも適当であるように思われる。無論それ以前にも写本の収集整理活動は正教会の聖職者によって行なわれていた。マカーリイによる大ミネイの編纂、カッシアン、アルセーニイによる『キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝』の編纂も、ученыеというよりкнижникиというべきこれらの人々の活動に属すると考えてよいであろう。信者に信頼に足るテキストを与えることを念頭においたこれらの活動も、その規模と質において決して近代文献学の成果に劣るものではなかった。因みに、ロシア古文書学の最初の成果とされるのは Дияние еретика Мартина（12世紀の著作と考えられていた）が偽書であることを証明したアンドレイ、シモンのデニソフ兄弟の公教会への論争である。デニソフ兄弟は1720年代の旧教徒であった。以来修道院や教会の堂宇に埋もれた写本を求めての勢力的な探索が続けられ、ポゴージン、ルミャンツェフ、バルソフといった有力な古写本収集家も輩出した。いずれのコレクションも現在国家の経営する図書館の所蔵に帰せられている。ソヴィエト時代においても古写本の収集は大学のロシア語講座の手で毎年を行なわれていたし、現在も続けられている。すでにポル・ウスタヴァなど15・16世紀に遡るような本格的な写本の発見は極めてまれで、農夫らが所有する17世紀以降の古儀式派（スタロオブリャッツイと尊敬の念をこめて呼びならわされるのが普通である）の写本が発見の主であるとのことである。

こうした研究の予備作業の周到さは驚嘆に値する。これがいかに驚くべきものであるかは、私ごときが百万言を費やすよりも、実際にレーニン図書館なりシチェドリン図書館なりに足を踏みいれることをつよくおすすめする。カルタチェカ（検索箱）を前に文献の検索を行なえばはっきりわかると思う。さらに具体的なテーマをもって閲覧ホールの相談員に

意見を聞いてみるのもよい。懇切過ぎるくらいの答えが返ってくるはずである。文献の組織化の周到さ、図書館職員のプロフェッショナリズムの圧倒的な高さは驚嘆を通り越して、失礼ながら薄気味悪ささえ感じさせるものであった。

ロシアの学問・芸術における高度の組織性に関してかねてから私は特別の注意を払ってきた。ほぼ200年近くの間に積み重ねられた資料の探索収集・系統立てた整理・研究者への自由な提供という営為の上に現在のレニングラード派の学問が成立していることは言うまでもない。重要なことはこの史料の海を力の限り泳ぎまわることであり、文芸学的理論の課題はこのことに比べれば二義的な立場にまわっても仕方がなかったのではないかとさえ感じさせる。実際安易な理論化をこの学派の人たちはもっとも嫌う。中世の文献におけるславаとчестьの用法をめぐってロットマンとジミンの間で戦わされた論争を思い起こしてもよい。確かに文献を知り抜いたジミンに比べれば、ロットマンの立論は児戯に等しい。資料との格闘を通してしか学問は成立しないのだという覚悟は極めて正当なものだ。

学問の組織性といったが、芸術に関しても同じであろう。帰国後縁あってペテルブルグのワガノワ・バレー学校の取材を翻訳したときに、練達の教師が若いバレリストが成功をおさめるための秘訣はなにかと訊かれ、シコーラを自分のものとすることですとまっさきに答えていたのが印象的であった。いたずらな思い付きをふりまわし、個性を誇ることが学問や芸術の達成からはもっとも遠い。日本人になじみの考え方からゆけば、型を仕込むことが何よりも肝要ということになろうか。型さえしたたかにものにしておけば、あとはダンサーと観客とが創る舞台という空間がダンサーの個性を自然に引き出してくれる。そのために教師と生徒が一体となって型の習熟に取り組む。彼らのこうした高度の組織性を達成するには自己など一切捨て去ることが不可欠だったはずである。“無私の精神”が存在したはずである。それが私達の国にあるかどうか。私達のスラヴ学にあるのかどうか。これを考えるとはなはだこころもとない。

約一年半の間めいっぱいお世話になってきた（幸い大きなトラブルはなかった）ロシアの人々のことを考えると、次から次へと様々な想

念が浮かんでくる。驚きと発見の連続であった。ただ残念ながら今はこれを披瀝する場所ではない。リハチョフの中世ロシア研究者のサークルに触れ得た幸運をその好機として、私の知りえた範囲内でロシア人の無私の精神とたくましさについて述べた。

報告

プスコフからノヴゴロドさらにモスクワへと延びる、中世期の街道途上に位置するとある村の古い教会で、１９２５年、K.K.ロマーノフによりフレスコ画の断片が発見された。フレスコはプスコフ第一年代記１４６５年の項に言及されたそれと同じということが確認され、、さらに、教会入口に書かれた文字により、フレスコが二人のプスコフ市役員・商人ザハリン・プトコフ、ヤコフ・イワノヴィッチ・クロトコフの注文により１４６５年に手掛けられ、当時の慣行に従って同年にその仕事が仕上げられたことも知られた。(*1)

この特筆すべきフレスコ断片を世に送り出したK.K.ロマーノフは、しかしながら、この断片のほんの一部分を見ることができたに過ぎなかった。かれはその断片について細心に書き残し、その一部を出版した(*2)。1933年国家中央修復委員会の修復技師達によってこのフレスコの清掃修復作業が行なわれた。最初に発見されたこれらのフレスコ画からミリョトヴォ教会の教会壁画が美術史の上で大きな意味をもっていること、中世ロシア美術の中で全く特異な位置を占めていることはすでに明かであった。

とはいうものの、発見から多くの年月を経て、フレスコ画の保存状態は日増しに劣化していった。このため、1949年この記念物を保存するという目的でJ.N.ドミトリエフ(*3)のイニシアチブにより、後世になされた壁の上塗りをはがして保存のための措置を施し、あわせてフレスコの補強を行なう試みが大規模に展開された。この保存のための一連の努力に伴って彼はさらにいくつかの事実をも発見した。そのうち最も重要なものはフレスコ画が二つの全く異なる筆法により描かれていることで、これは

ドミトリエフの意見に従えば二人の、少なくとも複数の職人達によって製作されたことを意味している。後に、V.N.ラザレフは6人若しくは7人以上の職人が製作を行なったと結論した(*4)。

このほかに、ドミトリエフは1951年の論文でこの修復のためのエクスカーションに関して報告を行ないながら、私達に様々な絵柄の構成を詳細に知らせている。そのなかで、著者の研究者としての関心をひき、現在にいたるまで私達の想像をかき立てているのは合唱隊雛壇下西方壁に描かれたスカマロフの像である。このフレスコ壁画の構成が明瞭に二つに区分されることに注意を促しながら、著者は次のようにそれを記述している。「その上方に寝台と横たわった女性が描かれている。女性は短い袖の白い上っ張りを纏っている。刺繍された縁のついた毛布は身体全体を覆うには至らず、何も纏っていない足と上っ張りの裾はむき出しのままである。寝台の後ろには聖母が立ち、横たわった女性の上に屈み込んでいる。聖母の左手は胸の位置まで持ち上げられているが、右手の位置は不分明である。それはそもそも見えないのかも知れない。悲しみにうちひしがれたその姿は強い印象を与えている。下半分はつぎのような様子である。真ん中に楽師が座って、弦楽器を演奏している。向かって左側には男女からなる会衆が座り、右側で女性が踊っている。」さらに、ロマーノフは堂々たる姿で描き出された楽師に関して筆を進めている。この楽師は、真ん中にあたかも玉座にあるかのように座り、それゆえにダビデ王を想起させる。例えば、13世紀ノブゴロドのフルドフスキー福音書には指板の幅の広い撥弦楽器をもつダビデ王が描かれているが、その表情は年輪を刻み込んで謹厳さの中にもどこか柔和さを感じさせる。しかし、このメリョトヴォのフレスコに描かれた楽器をもった人物は若々しく、なにか傲慢さを感じさせるほど精気に満ち溢れているという印象を与える。ドミートリイ・リハチョフの言葉を借りればその威風堂々たる有様は15世紀のムラヴィンスキーと言っても過言ではない。

しかしながら、その堂々たる印象という共通点にもかかわらず、この楽師は顔の表情に険があるような点がフルードフ福音書のダビデとは異なるように思われる。そして何よりも、壁面から読みとられた上書きに

よってこの楽師が他ならぬスカマロフであることが知られるのである。ではこのスカマロフとは一体いかなる存在だったのであろうか。私達はここで中世ロシア祝祭空間になくてはならなかったこのスカマロフという存在に関して若干の注記を試みたい。

スカマロフはこの壁画に現われたようにгудокやгусли（いずれも弦楽器）、дудка（笛）、бубен（打楽器）などの演奏や歌謡、また、その音楽に合わせての舞踏をなりわいとする芸人のことであり、ときに調教された熊による曲芸（マクシーモフが「セルガチ」の中で生彩溢れる記述を行なっている）や前述の楽器の演奏に合わせた人形劇の興行などを行なってロシアの祝祭的な空間を主宰した。これらの幕間に舌鋒の鋭い風刺的猥褻的言辞・あてこすりなどで観衆を陽気な笑いの中に誘いこむこともあった。端的に言えば、愚者の祭り・乱痴気騒ぎの主催者であった。（このマイナスの負荷に聖性が潜んでいると感得されていた。このことに関してはあとに述べる。）スカマロフはたびたび扱う楽器から「グースリ弾きгусельник」「オルガン弾きорганник」、また単に「奏手игрец」と呼ばれたり、「陽気な人たちвеселые люди」「道化役者глумец/глумотворец/смехотв-орец」「幇間прелесник」などと言われることもあって、その呼称は一定しなかった。スカマロフの語源は数々の仮説（騎馬民族スカマル起源説、アラビア起源説・マスハラ＝道化、ギリシア語起源説・スカマルコス＝笑いを主宰するもの、ゴート語起源説・スカマリ＝ふざける、скар=шуткаスカラムシュとの同根説、скор=шкураスカマロフ＝獣に仮装した人間説）にもかかわらず、最終的な結論は得られていない。しかしながら、歴史的な観点からその行状を判断するに、放浪芸人スカマロフはかなり古い時代から民衆の間で活躍していたと考られる。すでにキエフ・ルーシ時代の文献に後にスカマロフと名付けうる楽師は登場している。例えば、『キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝』中において、ロシア最初の癲癇行者とされるイサーキーを誘惑して狂乱に至らしめた悪魔はスカマロフの姿をしてあらわれる。ただし、一定の呼称は存在しなかった。楽師たちを呼び集めてスヴヤトスラフ公が乱行をおこなう場面にフェオドーシイが巡り合わせ、かれを諌めるというくだりがフェオドーシイ伝中に見い出さ

れる。この部分を執筆するときネストルは、明らかにスカマロフの範疇に属する楽師たちを指すのに「グースリの音を放つもの、オルガンを歌いならすもの、ザマルを奏するもの」という具合に様態を描写して済しており、スカマロフという言葉は使っていない。(*5)

中世の教会文書においては笑い・冗談・悪ふざけの類はすべて糾弾の対象となった。金口ヨハンネスは「キリストはしばしば悲しみに沈み、かれが笑ったのを見たものはいなかった。あるいはほんの少し微笑んだだけであった」と言っている。また「遊ぶことを教えたのは神ではなく、悪魔である」という言葉も残した。　言うなれば教会の公式的な立場はこうしたヴィザンツの教父たちの諸著作に立脚していた。にもかかわらず、復活祭の笑いや謝肉祭のバカ騒ぎを教会が黙認してきたことに端的に現われているように、実際は中世から笑いが完全に締め出されたわけではなかった。(*6)　この放浪芸人スカマロフもその例にもれない。百章会議に見られるように、彼らは社会の風紀を紊乱し、キリストの教えをけがすものとして、教会や公権力から厳しい攻撃に幾度もさらされてきた。にもかかわらず、民衆のスカマロフに対する愛は変わることがなく、全盛期には庶民ばかりではなく貴顕の間でも盛んにもてはやされ、公のなかにはイワン雷帝のようにスカマロフをおとぎ衆としてもつものも少なくなかったし、17世紀アレクセイ・ミハイロヴィッチの大弾圧以後も広場＝市の祝祭的な空間で命脈が保たれた。スカマロフは17世紀アレクセイ・ミハイロヴィッチの世に至って急速に衰えたが、これには外国音楽の流入による貴族層の趣向の変化という事情が背景として存在していたとされる。以前のようにスカマロフは珍重されなくなったのである。

若者たちを中心としたигрищеー集いは当然のことながらвеселье騒ぎを伴い、治安の紊乱にまで及ぶことが少なくなかった。しかし、こうした集いの核心部分にいたスカマロフはいわば治安の維持という実際的な目的のみによって教会と公権力から敵視されてきたのではなかった。中世ロシアにおいては宴会や酒盛りは特権的な位置を占めていたばかりではなく、宗教的な儀礼の性格をもっていた。このばか騒ぎが宗教的な儀式だとすると、その司祭はスカマロフとなる。バンチェンコは、フォークロア

の中でスカマロフが聖なるсвятойというエピテットを用いて呼ばれる例を挙げている。ここでスカマロフが聖なるものとされたのはその魂の清らかさによるのではなく、何か魔術的な力をもつものと感受されたためである。即ち、スカマロフは異教の祭祀をとり行なうものと見做され、正教会と競合関係にあったのである。このために正教会は執拗にスカマロフを攻撃の対象としたのであった。(*7)

メリョトヴォ教会のフレスコは発見されて以来、教会壁面に描写された最古のそして17世紀に至るまでただ一つのスカマロフ像として知られてきた。なぜこのようにスカマロフが正教会の美術に現われることが稀なのかは以上に述べたことから明らかであろう。スカマロフの技芸は異教信仰と密接な関係があり、このために正教の聖職者たちにとっては競合する敵手だったのである。教会美術における最古で唯一という言及に対しては注釈が必要かと思われる。というのは、キエフ・ソフィア聖堂階段下部にもスカマロフが描かれているからである。が、これは純粋にロシアの楽師ではなく、ヴィザンツの絵師達の手になるヴィザンツの楽師即ちミモスμιμοσであって、ルーシの風俗から得られたが画題ではない点でこの言説を覆すものではない。ここに挙げられた論考即ちK.K.ロマーノフ、J.N.ドミトリエフの労作のほかに、ロシア美術史・音楽史の分野における次のような学術論文の中でこのスカマロフ像はとり挙げられてきた：

История русского искусства 2 (1954), А.Бешин, Реставрация настенныхросписей успенской церкви в селе Мелётове // Древнерусское искусство, художественная культура Пскова (1968), Филатов, К истории техники стенной живописи в России // Древнерусское искусство, художественнаякультура Пскова (1968), А.Бетик, Псковская миниатюра 1463 года и проблемы живописи середины 15в. // Древняя история рукописной книги (1972).

その中で特筆すべきなのは、N.N.ローゾフの論考、論集“中世ロシア美術”『プスコフの絵画文化』(1968)中に掲載された論文「メリョトヴォ教会フレスコ壁画スカマロフ像再考」(*8)及び同シリーズ別の論集『問題と特質』(1977)における「フルードフ福音書の細密画における楽器

と演奏者アンサンブル」(*9)であり、これらにおいて、建造物の絵画と本の装飾との関係が、中世美術における楽器の描かれ方の問題が豊富な資料を通じて考究された。

しかしながら、研究の全く新しいステップが訪れたのはこの壁画の文献的な起源をめぐるリハチョフの論考(*10)によってである。彼は1964年に上梓されたこの論文においてフレスコの構成と“リモニス”のテキストとの驚くべき一致を指摘している。このテキストを含む写本は国立レーニン図書館に保管されており、最近の研究者はその写本の成立年代を14世紀後半としている。(トロイツァ・セルギエフ大修道院コレクション37番)この物語のあらすじは次のとおりである。

ある町にスカマロフがいていつも聖母を嘲け罵っていた。彼の夢に聖母が現われて自分を罵るのは止めて欲しいと懇願した。しかし、彼は罵るのを止めず、一層激しく罵り始めた。三度彼の元に聖母が現われて同じ願いを繰り返した。けれども、スカマロフはこれを聞き入れようとはしなかった。そんなある日、スカマロフが眠って休んでいると、もう一度聖母が彼のもとに現われた。が、このときばかりは何も言わず、彼に近づくと彼の両手両足を指で切るような動作をした。目が覚めてみると、スカマロフは手足を切り離されてころがっているのに気づいた。彼は自分が罰あたりな振る舞いのためにどんなに苦しんだかを皆の前で話した。

フレスコ画の構成は二つの部分からなっている。この構成は私達の物語の構造と一致するものである。この物語ははっきりと二つの部分に分れている。それは主要な事件と、これに先行して事態が熟すまでの過程である。(教訓的な狙いを持ったキリスト教教会文学の小さな物語の中でこのタイプの物語がもっとも典型的なものであるように思われる。同様な物語の構造はキエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝のなかにも看取される。このことに関しては別個に拙論(*11)がある。)リハチョフはその主題を次のように分析している。

①ミリョトヴォの寝台の脇に描かれているのは聖母である。手足をむき出しにして横たわっている(即ちこれがスカマロフである)のは手足が何かの病気に冒されていることを示すためである。

②スカマロフはフレスコ画でも、“リモニス”の物語の中でも、同様に"A"で始まる同数の文字からなる短い名前を持っている。

フレスコ画とテキストを同一のものと断定する根拠をこのように提示する一方でリハチョフは、そこに描かれた女性に関してドミトリエフが述べた事柄と符合しない重要な点に関しても言及している。即ち、リハチョフの指摘が正しいならば、寝台に横たわっている人物は女性ではなく、スカマロフでなくてはならないからである。しかしながら、この矛盾をリハチョフは次のように述べることで乗り切っている。「横たわっている人物の衣服は見えない。下部のスカマロフ像にも髭がないという点からもこの人物が女性でなくてはならないという必然性はない。」

以上に述べたようにリハチョフはミリョトヴォ教会の西側壁面のスカマロフ像の由来を理解する鍵を私達に与えた。そして、今私達の前に解決を待たれている問題は新しく発見された資料を基盤にさらに近い文献的起源の所在を明かにすることである。しかしながら、この問題に取り組む前にフレスコ画の主題がどんな変遷をたどってそこに行き着いたのか確かめてみることが必要であろう。　　リハチョフによって発見された“リモニス”のテキストは11世紀末の写本（宗務院コレクション№551,л.32об-33）に保存された『シナイ聖者列伝』所収の物語である。『シナイ聖者列伝』の翻訳はイワノワ(*12)の意見に従えば9世紀聖メトディオスによって行なわれた。この翻訳の原典は7世紀のヴィザンツの著作家イオアン・モスハの作品『心の原　Луг　Духовный』であり、私達はミネイ Patrologia Graeca 87巻 3部 に拠ってこれを参照することができる。カマルドルのアンブロシウスによって15世紀に翻訳されたラテン語訳も存在することも付け加えたい。

セルギエフ大修道院コレクションの“リモニス”のテキストが最も古い中世ロシアのテキストであるとすれば、16世紀の写本チュードフ修道院№318/aは、11世紀のこの写本の影響を受けて成立した最古のスラブ語訳まで遡ることができる。

しかしながら、研究者が注意を払わなかったスカマロフに関するテキストの写本が別に存在した。それはスキト聖者列伝に所収されてい

たわけでもいわゆる“リモニス”編纂本に収められていたものでもなく、独立した作品としてであった。この写本はモスクワ国立歴史博物館に保管されている文集チュードフ修道院コレクション№270に収められている。

いかにして私がこのテキストを発見するに至ったかをここで手短に記したい。現在私は“14-15世紀ノブゴロド・プスコフ地方における異教の残滓並びにそれらに対するキリスト教会の闘争”というテーマで博士論文を用意している。この研究は15世紀末プスコフ郊外スパソ・エリザロフスキー（エリザロフ救済）修道院で転写された文集“Златая Матица”中のテキストを基礎にして行なわれている。この写本は国立ロシア図書館所蔵の写本コレクションHCPKに保存されている。同じテキストがチュードフ修道コレクション№270にもあり、この写本を見るために私はモスクワ国立歴史博物館に赴いた。

私の主たる関心はチュードフ修道院文集に収められた異教に論難する内容のテキストであったが、このとき同時に『聖母が現われたスカマロフの話』にも注意を払い、これを筆写した。この著作のほかにチュードフ文集は金口イオアンネスの講話やその他の訓話・聖者伝を含む。そのなかには、『昇天した聖母の話』『アウグスト帝のまえでマルファ・ピラトを裁いたピラトの話』『ロシアの地にキリスト教が現われた話』『チェルニーゴフのミハイルと高士フェオドルの話』『最初の人間アダムの話』『ラフマネフと彼の地の驚くべき生活について』『 この世の基をなす教会の本について』『聖グリゴーリイ講話異教徒達がそもそも偶像に跪拝しおりしおこと』最後の著作が博士論文のテーマとなっている。テクスト分析が示すとおり、チュードフ文集と“Злаьая Матица”に収められたテキストには中世ロシアの異教的な風習に関する記述がかなり大掛かりに挿入されている。

総じて言えることはチュードフ文集は実に様々なジャンルの作品（アポクリファ、歴史・地理的な記述、聖者伝、訓話）から成立している。それはタイプとしてキリル・ベロゼルスキー修道院のエフロシンの百科辞典的な文集に近い。チュードフ文集に収められた作品の中で特筆に値するのは『ラフマネフと彼の地の驚くべき生活』であろう。この作品はよ

く知られているように、今までキリル・ベロゼルスキー修道院の学僧エフロシンによる写本が知られているのみである。この作品に関しては別個に詳細な研究が必要であると思われる。

チュードフ文集に105ページ表に収められた『聖母が現われたスカマロフの話』は凡そ次のようなものである。

Слово о скоморосѣ, ему же являяшеся святая Богородица
(ГИМ, Чудовское соб., №270, л.105)

Илия град есть, Линисявия фувиницьскый,скоморъхъ бьше некто именимъ Аитъ. И на всьхъ игрищехъ святую Богородицею ругаяся гудяше.

И явися ему святая Богородица: "Что ты зло створих, человече, тобь, яко при толце народ(а) повлациши мя и зль гл(аголе)щи." Онъ же въставъ не послушаше, но паче хулу вещаше. Пакы же второе явися ему святая Богородица, увьщающи его и гл(аголю)щи: "Не мою врежаеши, человече, тако душею, но свою." Се же пакы зль хуляша я. И она пакы третьее явися ему тоже гл(аголю)щи и увьщевающи. И яко же не остася, но паче хуляше.

Въ единъ же от днии полудни яко лежаше на одрь своемъ, и явися ему, ничто же рекши, но токмо и перстомъ своимъ начертъ обь руць и нозь обь. И възъбудивша от сна, обрьт(о)ша отсечень имый руци и обь нозь.
И трупъ обрьтеша лежа.

О сихъ же злобивый исповьдашеся всьмъ, еже есть створило ему, иже похулениемъ своимъ пострада и ч(е)л(о)в(е)колюбия Влад(ы)ч(и)ца нашея Богородица послуша. Богу же нашему Слава в в(ь)кь. Аминь.

（日本語訳）

フェニキアのリニシャヴィアにイリヤという町があった。この町にアイトという名のスカマロフが住んでいた。人を集めてはいつもグドクを奏で聖母を罵っていた。

あるとき聖母が現われて言った。「あなたは何という悪事を行なっているのですか。私を公衆の前に引っ張りだして悪口を言い立てるなんて。」彼は目を覚ましても言うことを聞かず、ますます激しく罵り始めた。再び聖母の前に聖母が現われて、このスカマロフを諭して言った。「あなたは私のではなく、あなた自身の魂を損なっているのですよ。」しかし、かれはますます激しく罵りだした。そして、3度目に彼のもとに聖母が現われ、同じことを言って諭した。しかし、かれは罵るのを止めるどころかますます激しく罵り始めた。

ある日、昼間彼が自分のベッドに横たわっていると、聖母が現われて、何も言わず、ただ指で彼の両手両足を切る動作をした。眠りから覚めると、両手両足が切り離されているのに気づいた。身体が地に投げ出されているのに気づいた。

自分の身の上に起こったことについてこの悪人は皆に話をした。かれは自分の悪口のために災難を被り、我らの聖母の慈愛に身を委ねたのであった。我らが神に栄えあれ。アーメン。

ギリシア語の原典並びに他のスラブ語訳とチュードフ文集のテキストとの異同をまず検討してみよう。

まず、第一に注意を払ってスカマロフの名前を見てみたい。新しく発見された私達のテキストではそれはアイト Аитъとなっている。リハチョフも「スカマロフの名前は諸写本で定まっていない」と記している。セルギエフ大修道院コレクションの“リモニス”中では「アント Антъ」であり、府主教マカリイの大チェーチイ・ミネイでは「ゴイノ Гоино」である。カラロフ名称ブルガリア図書館の写本（№694/63 18世紀）においては「アイン Аинъ」である。さらに、ギリシア語の原典では「ガイアノス γαιανος」ここに集まった資料によってこの問題を検討したい(*13)。

ギリシア語の原典で私達が出会う名前はγαιανοςである。この名前はまず一見して次のように訳せるであろう。「地の性質をもっている。地の。即ち、転義として、死の。」この読み方に従っているのは、例えばシナイ聖者列伝の「ガイン Гаинъ」、リハチョフによって援用された大チェーチイ・ミネイの「ゴイノ Гоино」である。

“リモニス”における「アントАнтъ」、ブルガリアの写本における「アインАинъ」はおおもとの読み方が単に曲用したものと考えられる一方、チュードフ修道院コレクションのヴァリアント「アイトАитъ」はまず間違いなく意味の上からの転用であり、ギリシア語の“αἴτιος＝罪のある。犯罪の。”と結びついている。

ここでミリョートヴォのフレスコ画においてスカマロフの名前がどのように書かれていたのかに特別の注意を払っていただきたい。ドミトリエフの最初の論文以来、スカマロフは「アント」という名前で一般に知られてきた。1994年10月に私がとった写真においては左斜下から右斜上に向かっていることがわかる。この時代 Н の文字は左斜上から右斜下あるいは水平である。以上のように、チュードフ写本におけるスカマロフの名前とフレスコにおけるそれは一致する。有名な「アント・スカマロフ」は「アイト・スカマロフ」であったのである。

もう一つチュードフ修道院コレクションに存在する本質的な異同はスカマロフの行為の記載である。ギリシア語のヴァリアントでは、ス

カマロフは聖母を冒涜しながらβλασπέμωνν劇場あるいは見せ物で公衆の面前に姿を現していたετεατρίζεν。シナイ聖者列伝ではこの箇所はつぎのように訳されている。「あらゆる集まりに出てきては聖母を罵り嘲けっていた。」この動詞“кужаше”は“кудити”に遡り、“хулить, осуждать, выставлять на всеобщее осмеяние”の意をもつ。“リモニス”においてはこの古い動詞がさらにわかりやすいかたち取って変わっている：“ругаяся, хуляще ю”。チュードフ修道院テキストではこの“ругаяся гуляше”が本質的に意味を変えている。ということは、スカマロフは「グドク」を、即ち、楽器を演奏していたのである。H.H.ローゾフがその論文で示したようにメリョトヴォのスカマロフは手に弦楽器グドクをもって描かれている。ここで私達が確認することができるチュードフ写本のテキストとメリョトヴォの描写との一致は重要である。

最後にもう一つディテイルの一致を指摘したい。スカマロフの断罪の場面においてチュードフ写本テキストの編集者は、この人物がただ単に横たわっていたばかりではなく、それがベッドの上であったことを付け加えている。このディテイルはメリョトヴォのフレスコの構成上部において反映されている。

すでに私達が検討して来たように、これらすべての読みが『スカマロフの話』の新たに発見されたテキストとメリョトヴォの描写との類縁性を裏付けている。チュードフ写本の出所・年代に関する分析もまた、この一致が偶然ではないことを示している。カリンスキーはその研究『15世紀プスコフ並びにプスコフ州の言語』(*14)において、この文集はプスコフ地方の方言の最も重要音声学的・形態学的な特長が最もあらわに現われたものと位置づけている。

文集の成立年代はすかしの分析を基礎に行なわれる。この写本中に出会うすかし5つのうち3つ（葡萄の房、王冠、球）がノブゴロド近郊ヴャジシ修道院で1464年に筆写された写本ОЛДПF.90に極めて近い。さらに、葡萄の房のすかし模様はE.M.シュヴァルツのアルバムに転載された1463年ノブゴロド勤行用月課経のそれに極めて近い。残念ながら年代の接近したプスコフの紙製写本は私達に知られていない（1463年はベルガメンに書き

写されている）。しかしながら、ノヴゴロドの資料はチュードフ文集が15世紀60年代中盤に遡ると同定することを許すものである。このように、写本の成立年代・場所はメリヨトヴォのフレスコの成立場所・年代と極めて近い。

チュードフ写本『スカマロフの話』のテキストの特性は編集上の変更から来るものである。即ち、テキストの意味上の改変の結果である。そこではスカマロフのしぐさがより具体的に描き出されていた。即ち、この様にいうことができるであろう。イオアン・モスフの話や『シナイ聖者列伝』『リモニス』のヴァリアントで非難の対象になっていたのは俳優＝スカマロフの職業ではなく、聖母に対する罵りのみであった。しかし、15世紀のテキストではさらに補足的な意味が現われる。ここではスカマロフの行為がさらに詳細に読者に提示されることによって非難の対象はそのプロセス（гуляще）自体にまで及んでいる。この点から新しいスカマロフの名前「アイト＝罪のある・犯罪の」が現われたわけについて考えることができよう。即ち、スカマロフという職業自体がすでに咎められるべきものとなったのである。

フレスコ画をさらに分析してゆくと、この関係が一層はっきりするであろう。スカマロフの像は西側の壁に描かれていた。ここは伝統的には最後の審判が描かれることになっている。即ち、このスカマロフの絵は会衆が教会から出てゆくに際して地上生活の誘惑に陥ることをいましめる役割を担っていたと考えることができる。また、この場所が合唱隊のすぐ下に位置していることも忘れてはならない。合唱隊＝天上の音楽に対してスカマロフ＝地上の蠱惑に満ちた音楽と舞踏が、天と地のレベルで対比されている（ギリシア語の原典ではスカマロフの名前がガイアノスであったことは興味深い）のである。中世ロシアでは若干の例外を除き、教会音楽として器楽の演奏は禁じられていた。スカマロフの運命は死後の生活でばかりではなく、この世においても懲罰がありえることを人々に思い起こさせる役割を果たしていた。

メリヨトヴォのフレスコ画と私達の文献的な起源との間に重要な違いも存在する。スカマロフの脇に踊る“性悪女”と観客とおぼしき人

々の群れが描かれている。これによって、みせしめはスカマロフばかりではなく、この見せ物への参加者すべてに及んでいると考えるべきであろう。

以上のコンテキストから明らかなのは、プスコフ版『スカマロフの話』は同じくチュードフ文集に収められた異教を論難する聖グリゴーリイの講話と同じ方向性を持っていることである。じつに15世紀にはスカマロフ、異教祭礼、“不信心”なる本の題字、写本の余白の滑稽な走り書きなどが次々と非難の対象となった時代であった。同じ時代において以上のような事柄に示された関心によって証されるのは即ち、中世ロシアの文筆家たちの世俗の事柄に対する関係の変化である(*14)。こうした文筆家一般に見られる方向性により、『聖グリゴーリイ講話』における異教祭礼の記述、メリョートフ教会のフレスコに描かれた中世ロシア最古の『スカマロフの演奏風景』が後世に残されることになった。そして、後者がチュードフ写本に遡ることができるということを本論によって示そうとしたわけである。

註

(*1)Псковские летописи вып.1, м-л, 1941, стр.71, 「この年にメリョトヴォの石造の聖母昇天教会の壁画が描かれた。」

(*2)К.К.Романов, Мелётово как источник истории Псковстой земли // Пробл-емы истории докапиталического бощества, №8,9, 1934, стр.143

(*3)Ю.Н.Дмитриев, Мелётовские фрески и их значение для истории древне- русской литературы, ТОДРЛ т.8, стр.404

(*4)В.Н.Лазарев, Древнерусские мозаики и фрески, стр.67,

(*5)А.А.Белкин, Русские скоморохи, М., 1975, стр.30-52

(*6)Я.С.Лурье, Книгописец Ефросин и борьба против "глумов" и смеха в древнерусской письменности, INSLP №31-32, p.257, 1985

(*7)А.М.Панченко, Русская культура в канун Петровских реформ, Л.,1984, стр.72-73

(*8)Н.Н.Розов, Еще раз об изображении скомороха на фреске в

Мелётове //
Древнерусское искусство "художественная культура Пскова", М., 1968, стр.85-96
(*9)Н.Н.Розов, Музыкальные инструменты и ансамбли в миниатюрах ХлудовсойПсалтири, М., 1977, стр.91-105
(*10)Д.С.Лихачев, Древнейшее русское изображение скомороха и его значение для истории скомороха, Проблемы сравнительной филологии собрник статей к 70-летию В.Н.Жирмунского, М.-Л.,1964, стр.462-466
(*11)1990年度に東京大学に提出した修士論文『キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝における物語の比較研究』レジュメ参照
(*12)Т.А.Иванова, Заметки о лексике Синайского патерика // Проблемы современной филологии собрник статей к 70-летию В.В. Виноградова, М., 1965, стр.149-152,
(*13)Д.С.Лихачев, Древнейшее русское изображение скомороха и егозначение для истории скомороха, Проблемы сравнительной филологиисобрник статей к 70-летию В.Н.Жирмунского, М.-Л.,1964, стр.462-466
(*14)Н.М.Каринский, Язык Пскова и его области в XVв., СПб., 1909, стр.96-109,
(*15)Я.С.Лурье, Книгописец Ефросин и борьба против "глумов" и смеха в древнерусской письменности, INSLP №31-32, p.265-266, 1985

文献

1. А.А.Белкин, Русские скоморохи, М., 1975,2. А.Бетик, Псковская миниатю-ра 1463 года и проблемы живопи-си середины 15в // Древняя история рукопи-сной книги (1972).
2. А.Бешин, Реставрация настенных росписей успенской церкви в селе Мелётове // Древнерусское искусство, худо-ждественная культура

Пскова (1968),3. Ю.Н.Дмитриев, Мелётовские фрески и их значение для истории древне- русской литературы, ТОДРЛ т.8, стр.403-412
4. Т.А.Иванова, Заметки о лексике Синайского патерика // Проблемы современной филологии собрник статей к 70-летию В.В. Виноградова, М., 1965, стр.149-152,
5. История русского искусства 2 (1954),
6. Н.М.Каринский, Язык Пскова и его области в X V в., СПб., 1909, стр.96-109,
7. В.Н.Лазарев, Древнерусские мозаики и фрески, стр.67,
8. Д.С.Лихачев, Древнейшее русское изображение скомороха и егозначение для истории скомороха, Проблемы сравнительной филологиисобрник статей к 70-летию В.Н.Жирмунского, М.-Л.,1964, стр.462-466
9. Я.С.Лурье, Книгописец Ефросин и борьба против "глумов"и смеха в древнерусской письменности, INSLP №31-32, p.265-266, 1985
10. А.М.Панченко, Русская культура в канун Петровских реформ, Л.,1984, 11. Н.Н.Розов, Еще раз об изображении скомороха на фреске в Мелётове //
стр.85-96
12. Н.Н.Розов, Музыкальные инструменты и ансамбли в миниатюрах ХлудовсойПсалтири, М., 1977, стр.91-105
13. К.К.Романов, Мелётово как источник истории Псковстой земли // Пробл-емы истории докапиталического бощества, №8,9, 1934,
14. В.Филатов, К истории техники стенной живописи в России // Древнерусс-кое искусство, художлественная культура Пскова (1968),
15. 1990年度に東京大学に提出した修士論文『キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝における物語の比較研究』レジュメ

付記

留学期間中を通じ、ロシア文学研究所研究員アレクサンドル・ボブロフ氏の一方ならぬ援助を受けた。本研究も彼の親身な協力がなければ達成できぬものであったと思う。とりわけ、ウオーター・マークの判定に関しては、氏が長年シチェドリン図書館の写本室で培った経験がなければ意味のあることが書けなかった。他にも、実証的な資料の扱い方、文献の逍猟に関して極めて有効な示唆を受けた。記して心からなる感謝の意を表したい。